翻訳

「スペインはまだ歴史の謎か——サンチェス・アルボルノスを再読して」

ミゲランヘル・ラデロ・ケサダ
尾崎明夫 訳

はじめに

スペインは西欧諸国の中で唯一、同じ国土の上で八世紀のもあいだイスラム教徒と対峙して過ごした経験を持つ国である。他の西欧諸国が程度の差こそあれ、ゲルマン人の侵入後の混乱が収まると一〇世紀を除いてはさしたる外民族の侵入に悩まされることなく、社会、経済、文化の進展を遂げることができたのとは違って、いわゆる西欧中世と言われる時代にスペインは二大宗教がぶつかり合った死闘の中でもがくことを強いられた。この事態が近代スペインの形成に大きな影響を与えたことは疑い得ない。

このスペイン中世の意味合いをめぐっては、二〇世紀の五〇年代からスペイン史学界の中で激しい論争が行われた。しかし、この論争に最初の石を投げたのは、歴史家というよりも言語学者にして文学評論家、セルバンテス研究の大家アメリコ・カストロ（一八八五〜一九七二）であった。すなわち、一九五四年に『スペインの歴史的現実』を発表し、スペインはキリスト教、イスラム教、ユダヤ教の三宗教の共存から生まれたもので、七一一年以前のイベリア半島にはスペインは存在しなかったとしたのである。

この説に対して即座に異議を唱えたのが、スペイン中世史学界の泰斗クラウディオ・サンチェス・アルボルノス（一八九三〜一九八三）であった。前掲書の上梓から二年ほどして浩瀚の書『スペイン、歴史の謎』を著し、前者の説に逐一反論を加えていっただけでなく、カストロの問題提起に対して自らの見解を示しさらなる問題提起を試みた。つまり、第一巻において、先史時代から説き起こして幅広い文献と研究を引くことによってイベリア半島の住民の心性気質の連続性を証明し、第二巻においては、なぜスペインは近代に於いて他の西洋諸国と異なる軌道をたどったのかを探求したのである。

またこの『歴史の謎』においてサンチェス・アルボルノスは、自説を展開する前に、歴史とは何か、歴史家の仕事とは何かという問いと格闘している。そこには歴史学を専門職とした著者の気概以外にも、哲学や文学の研究方法の違いについての興味深い考察が見られる。この書は七〇〇ページ以上の分量を持つ以外に、裏に潜む膨大な博識と深遠な思想ゆえその翻訳は至難の業であろうと思われる。

幸いに、現在スペイン中世史学界で指導的な活動を繰り広げているミゲランヘル・ラデロ・ケサーダ教授が、この論争、とくにサンチェス・アルボルノスの業績の遺産について簡潔かつ総合的な評価を行った。その内容は、論争の細部に言及するものではないが、論争の学問的意味を解説すると同時に、しばしば見られた議論の行き違いや後代の誤解の原因を示し、後続の歴史家たちが犯した無関心を糾弾し、先代の大家たちが残した遺産を適切に評価利用しようと呼びかけるものである。ここに拙い日本語に直したものが、それである。この小訳によって、スペイン史学界の現状と、スペインとは何かをめぐる論争が少しでも知られることになれば幸いである。（注）

○○○○○○○○○

はじめに

一九七三年、クラウディオ・サンチェス・アルボルノス先生は新しい著作を世に問うた。それは、氏がそれ以前に発表した広闊な歴史解釈に適宜修正を加えまとめたもので、『スペインとスペイン人の形成のドラマ』と

題された。その書の献辞に次のように書かれている。「私のスペイン人とアルゼンチン人の孫たちに。諸君がスペインの過去と現代を正しく理解し、悲観論に陥ることなく理性的にその未来に立ち向かっていくように」と。年齢だけでなく、職業と履歴を考えると、私の年代の歴史家たちは多くが学問的な意味で先生の孫に数えられると言えよう。私個人についてそう言うのは自惚れのそしりを免れ得ないだろうが、たとえそうであっても、初めに、この考察が上記の献辞で表されたのと同じ望みを出発点にしていることをはっきりさせたい。

この小論は、氏の傑作『スペイン、歴史の謎』に沿って進められ、本論の題もそこから来るのであるが、最初に断っておきたいことだが、本稿の目的はスペインが歴史的謎でありつづけているのかどうかを解明することではなく、この半世紀の間にスペイン史を解明する鍵となる問題についてその解釈に視点の変化があったのかどうか、またあったならどういう変化であったのかを明らかにすることである。

いずれにしても、アルボルノスの作品の題のように、スペインの歴史を「謎」とすることは困惑を惹き起こすかもしれない。イベリア半島の土地と人間は、他の地域のそれとはあまりにも異なるので、本来なら学問研究と知的な理解の対象となるべきものが謎と呼ばれる範疇に属するのか。本当を言えば、ただ未来のみが謎である。過去について言えば、それは知ることができないという可能性と、それに関して様々な解釈が並立する可能性はあるが、もし過去が謎だとしたら、我々がよく目にすることであるが、専門的歴史家の示す説明よりも、超歴史的、あるいは哲学的な説明の方がつねにより多くの聴衆の注意を引くという危険が生じる。思うに、サンチェス・アルボルノスの全作品は、謎ではなく単なる歴史的無知がはびこり続けるような状況を避ける、あるいはより正確に言うなら、そのような状態に対して断固として戦うための超人的な努力であったと言える。氏にとっては、「スペイン史の神秘的な謎を解明しようとして、過去の中に潜水すること」は、研究し、説明し、無知を克服することであって、それゆえに、謎という言葉を使っているのは、修辞的な目的であって、過去とは謎である

と断定するためではないのである。

サンチェス・アルボルノスは、過去の歴史についてスケールの大きな問題を提起し、研究と意見と論争を適切に混ぜ合わせながら、自分の生きる時代では最高の知識のレベルにおいて、答えを提供できるという数少ない偉大な歴史家の一人である。氏が属した世代は、その重立った歴史家たちが自分の専門的研究を疎かにすることなく、同時にスペイン史を全体として説明するという必要を切に感じた世代であった。我々は、彼らの研究結果に対していかなる態度を取るかは別にして、いまだにこの世代の遺産で生きている。モノグラフィーと細分化した研究のこれほどの氾濫、また方法論の刷新と成果の獲得を目にし、より広い範囲に及ぶ新しい考察を提示することができるはずの今日に致っても、である。

もし現在活躍中の歴史家がこの方向に努力を傾けるなら、ここ数十年に洪水のように現われた我々の過去に関する歪曲された解釈が与えた害を埋め合わせすることができるであろう。ただし、適切なコミュニケーションの道具を使い、大衆に分かりやすい言葉で伝えることができたらという条件があるが。しかし、たとえこの埋め合わせができなくても、前の世代が注目した大きな問題に再び立ち向かうであろうし、彼らが到達した結論から出発し、それに修正を加えることにもっと関心を示すであろう。また我々は時には先輩たちの仕事を破壊したり忘却するということをしでかしたが（これらは故人を褒め称えることと両立する）、そういう愚行から手を引き、専門家だけでなく全スペイン社会が注目する問題に光を当てることに努力を傾けるようになろう。サンチェス・アルボルノスを記念し思い出すこと——つい最近我々は彼の生誕一〇〇周年を記念したが——が意味を持つのは、先生が課題とした大きな諸問題の回復が緊急であることに目覚めるときである。それは、それらを今日の歴史家たちの関心を引く問題と比較し、我々が歴史的文化的に特殊スペイン的なものから生まれ出て、またそれの構成に一役買っているいることを理解するためである。スペインを巡る大きな問題について、氏が、そして氏以前に他の先覚者たちが行ったように、繰り返し説明を試みることが我々に求められている。

一　歴史についての若干の基本概念

歴史学の基本的な理論や概念は、非常にゆっくりとしか変化しないが、それでも変化を被る。『スペイン、歴史の謎』の第一章を検討してみよう。そこには次の文が見られる。「歴史は、そこ、川の水のように、我々の後ろ、我々の中にある。ちょうど、我々を未来に押して行きながら。我々はそのメッセージに耳を傾けず、果たさずにいることは可能であるが、それは民族、いや全人類の生にとって大きな危険となろう。」それゆえ、サンチェス・アルボルノスが研究に没頭したのは、単なる学識のためやまたそれ自体は気高く人間的である知識欲のためではなかった。氏は、歴史家には自己の職業を通じて、自分の住む社会の歴史的意識を形作るために決然として貢献する義務があると考えていた。なぜなら、歴史家の使命は「民族と人類の未来に向かって建設的なプロジェクトを持つ、または持つべき独創的で自立する知を作り上げる」ことにあるからだ。氏は、「歴史を書くという複雑で至難の業と、それを試みる人間に備わる才能の間に横たわる深い溝」をよく理解していた。しかし、個々の研究が相手にできるテーマがいかに限られていて特殊なものであろうが、全体としての歴史的現実の場を想像しながら研究することを決して放棄することはなかった。

つまり、クローチェが「自由の偉業」と呼んだものを人間が実現する場としてである。クラウディオ先生は書いている。「自由はこの地上にある。天上にもある。彼岸の完た神の霊の息の下に。そして、パウロが話してい全な自由が」と。それゆえに、氏は歴史の中で自由を実現するという謎——これはなるほど謎である——の中に、人間的なものの価値と各個人と全人類の価値自体を理解するための鍵があるとはっきりと理解した。この意味で、氏は歴史家であったと私は思う。この主張は、歴史的知識は無用であるとか、もしくは無効であるとする人々に対するもっとも単純で恒常的な反論である。歴史的知識は不十分で不完全であるということはあり得るし、事実そうである。しかし、この学問の対象の中にこそ、固有の価値と有用性がある。このことを否定するこ

とは、我々が我々自身について持っている概念を否定し、永劫の無知という奴隷状態に閉じ込められることである。

その上、この無知の奴隷状態からは哲学的思索や文学のエッセイによっては抜け出すことはできない。サンチエス・アルボルノスが、オルテガ（『無脊椎のスペイン』）やカストロ（『歴史の中のスペイン』）という互いに非常に異なる二つの作品に対していらだち、歴史を専門職とする者の立場から独自の説明を試みようとした理由がここにある。なぜなら、氏の言葉によれば、「歴史的に思考することを学びたければ、歴史的研究とそれが必ず要求する考察に実際に携わるのが最も適切である」からである。さらに曰く。哲学者は「歴史家には禁じられた行動の自由を許され、空の高みにある軽い空気の間で騒ぎ立てる。歴史家は重厚な空気の下で大気圧を感じながら働かねばならない。哲学者たちの労作は洗練され、深みがあり、感嘆に値する――　私はそれらの前に深く頭を下げる――　が、それらは常に浮遊して、不安定で、よく制御することができないものである。歴史家は、色々な対象を相手にするが、それらはいつも手で触れることができる重さを持ったものである。このような粗い材料では、歴史家を批評する哲学者たちが建てるような大胆な建築物を作り上げることはできない。それらはあまりに複雑でそれらを収集し整理し研究することには時間がかかり、何世代にもわたる学者の努力が必要である。というのは、歴史家は常に二つの連続する仕事をこなさないといけないからである。それは、まず過去の流れを知ること、次にそれを理解することである。」

この二つの仕事は我々を圧倒するほど膨大なものになり、粘り強い沈思熟考なしには不可能事となる。さらに続ける。「歴史が人間を作り、人間が歴史を作ってきた。この何千年もの間行われてきたこの二つの『作る』の相互作用を歴史家がどう考えるかに、結局最後には彼の歴史的創造がかかっている。」しかし、それだけでなく、このことは歴史を全体として、過去を無数の文化的、生命的な企画を含む時間と空間からなる宇宙として想像することを要求する。というのは、世界史を知って初めて一地域の歴史が理解できるからである。つまり「ただ世

界史という枠の中でしか提起できない歴史学の真の問題が無数に」存在するのである。

このような考えによって、サンチェス・アルボルノスは、全体的な歴史解釈だけでなく、博識に溢れた研究も進め、またそれと同時に、個人のこと、特殊的なこと、個別的なことの歴史を考察することの必要性も忘れることはなかった。なぜなら、つまるところ、人類の歴史、各民族、各グループの歴史は、遠い先史時代に遡る源流から自由に向けて歩みを続ける諸々の力の非常に複雑な絡み合いの、常に生きている結果であるからだ。時間を通じて人間は、「自己を霊的に変化させるプロセスに入ることができ、それによって終りのない上昇に導かれた」(ヤスパース)。クラウディオ教授は自分の中心的思想を何度も主張する。「我々は次の点で合意した。つまり、人間は自由であり、人間集団は宇宙の他の生物とはとても異なる欲求によって突き動かされてきたし、今もそうであるという点である。その欲求は、同時に物質的であり精神的でもあるが、太古の時代からそう大きくは変化していない。・・・人間は自由である。それは純粋な自由、純粋な生成である。然り、人の人生は本質的に自由で・・周囲を動かし導く積極的で大胆で創造的な力である。」

しかし、人の自由な行動は、様々な具体的な歴史的条件から制限を受ける。その条件は一方で肉体的生物学的な条件と結びついており、他方で集積された経験と未来への信頼から霊感を受ける。それらの歴史的条件の一つ一つの中においてのみ、人間は「自由な決定ができる。」偉大な人間たち、少数のリーダー、エリートたち、そしてそれぞれの過去によって一定の生活スタイルを身に付けた全体として各民族、また、最後に人間に一人一人にも同じことが言える。なぜなら、――今度はオルテガの言葉であるが――「誰も人間として生きる道をゼロから出発するのではない。すでに歩まれた道の終点から出発し、こうして自分の人間としての歩みに、すでに歩まれた人間の歩みを付け加えていくのである。」先人たちの到達した点から出発してのみ、各人は歴史の中で唯一無二の個性を発展させ、歴史に貢献できるのである。この企画をより良くより完全にできるために、自分の自

由を何が基礎付け条件づけているのかを知ろうとすることが必要であると考えるのが、道理に合っているのではないだろうか。だからこそ、歴史家の主要な仕事は、「自分の時代、自分の国の歴史的意識を形成すること」に貢献することなのだと氏は結論するのである。

二　歴史研究の昨今

今概観したばかりのサンチェス・アルボルノスの思想は、数世紀に渡って様々な著者によって様々なし方で発表されてきた、ヨーロッパ文化独自の世界観に組み入れられるだけでなく、今日もまだ効力を失っていない。ついでに言うなら、おそらく今日であれば、氏のようにうらやむべき高尚な文章でもっては表現されないであろう。しかし、そのことはその理論の受容という事実には関係がない。氏が取った展望は、二〇世紀の二〇、三〇年代に独特のもの、つまりピレンヌ、ドプシュ、またはホイジンガの遺産であり、ブロックやガンスホフと共有されるものである。当時は、概念的原理と研究方法と目的の三つの関連は、今日とは異なっていた。同様に、使用できる知識の量、歴史学という職業に従事する学者の数も異なり、彼らを取り巻く世界も現代と比べてずっと一元的で、第一次世界大戦というおぞましい試練を経験したにも関わらず、おそらく過度に単純で楽観的な進歩思想にまだ固執していた世界であった。

当時の主要な変化は、実証主義的歴史学の克服であり、個々のできごとや状況を理解するための基礎として、後にブローデルが中期、長期持続と定義することになる展望が取り入れられる歴史学の基礎工事が始まった頃であった。サンチェス・アルボルノスは、この新しい方法の実験に参加するのに非常によい条件を備えていた。というのは、エドワルド・イノホサによって始められた法制史学派と、ラモン・メネンデス・ピダルによる文献学的歴史学の両方の伝統を受け継ぎ、また考察のプロセスとして、オルテガとデュルタイの学派の周囲に成熟していった歴史哲学の理論的背景も活用できたからである。そのうえ、一九世紀の最後の三半世紀からベルリン学派によって発展させられた歴史経済学の理論が到達したレベルにも到っていたことは明らかである。この他にも、マ

ラニョンのような学者と比べればずっと低い程度であるが、分析心理学の影響によって今日心理歴史学や集団的メンタリティーと呼ばれるものに類似したことを想像した可能性もあろう。

しかし、当然のことであるが、氏はその後の時代に発展する他の知的流れや傾向にはそれほど参与しなかった。例えば、構造主義は、当時まだ言語学と経済理論の域を越えておらず、他の社会科学や歴史学に影響を及ぼし始めるには六〇年代を待たねばならない。歴史哲学はまだその主役の地位を社会学には譲っておらず、マックス・ウエーバーの高大な業績は知られていたが、今日のように我々の助けとなり、時にはおぼれさせるくらいの量で我々を圧倒することはなかった。シュペングラーと、一九四五年以降トインビーによって提唱された諸文明の歴史の世界的な解釈は、専門的歴史家の展望とは相容れず、アンリー・ベールによって粘り強く与えられた影響にもかかわらず、諸文明の比較史と歴史的統合に関するすべてにおいて現代より多くの欠損があった。社会人類学は歴史学の伝統的対象の中にはほとんど顔を出していなかった。複数の社会科学を結ぶ学際的研究の可能性もまだ発展していなかったし、それゆえ、歴史的人口学や経済史や社会史に関係するような、今日では普通になった研究方法もまだ知られていなかった。システム理論も練り上げられていなかったし、そのため、今日では文明の概念に極めて緊密に結びついているグローバルシステムの概念自体も発展していなかった。マルクスとエンゲルスの著作は使用されていたが、それは目的論的な哲学としてか、社会政治的闘争のための単純化された道具としてであって、ここ四〇年の間にいくらかの著作家の中に見られるようになった新しい発展や考察はまだ生まれていなかった。

歴史家たちに対しても、彼らを理解しようと思えば、歴史研究の他の対象に当てはめるのと同じ基準を当てはめる必要がある。つまり、歴史家たちをも彼らが生きた時間的文化的な文脈に置いて理解しようとすることである。しかし、全ての職業と同様、歴史という職業もそれに取り組むとき、その出来栄えには質的違いが出てくる。歴史家の仕事は、単に仕事の方法論や技術、または新し

い流れ（ときには、はかない流行にすぎない）についての知識だけではない。それはまた芸術でもあり、――女神クレイオの下にいるのは伊達ではない――実際、ある人たちは人間わざの上を行き、天才の域にまで達する。歴史家というものは、努力の結果としてそれになるものであるが、同時にある程度まで、生まれつきのものでもある。言い方を変えるならば、音楽家や画家と同じように、歴史家も程度の差はあれ自分の仕事の中に創造の才能を発揮するのである。クラウディオ教授は、その才能を最高度にもっていた。それがために、氏が本質的なものとして提起した歴史的問題は現在も重要であり、興味深さを保っているのである。また、それゆえ氏の作品は先駆者的な考察に満ちていて、今でも読者を引きつけて止まないのである。

一九九三年、その生誕一〇〇周年を記念したとき、講演者の一人（Martínez Show）はアルボルノスが歴史の複雑な織物を織り成す異なる糸の価値を熟考するために力強い直観を持っていたと指摘し、その思想の主要理論として次のものを挙げている。つまり、地理的決定論の否定、経済的要素の影響（生活という永遠の暴君）、集団的メンタリティ（理想、激情、欲望、愛、恐れ）に歴史を形作る力を認めること、事実の優位（事実が歴史ではないが、事実なしには歴史はできない）、歴史の主人公と彼を囲む歴史的枠組みとの相互作用など、である。

三　ある歴史学の伝統の受容と批判

前項の考察が終わった今、サンチェス・アルボルノスによって提唱されたスペインの歴史的現実についての解釈の鍵がどのように形成され、どのような広がりをもつのかを理解するのに条件が整えられたと言えよう。氏が何度も書いたことであるが、「スペイン的なるもの」とはその地理と歴史の結果で、各時代は前の時代から残されたものに自己の足跡をつけくわえ変化を与える。ここまでは異を唱えるものは誰もいまい。しかし、どうも我々の著者にとって、スペイン的人間（ホモ・ヒスパヌス）が独自の資質を形成するのに特別に寄与した時代が二つある。一つは、それを最初に形成した先史時代であ

り、もう一つはそれを再び練り上げたレコンキスタの時代である。この説明からは、たとえ氏が遺伝的特質の形成が動的で歴史的な性格を示すといかに強調しようとも、本質主義的で原型論的な匂いが発せられる傾向がある。なぜなら、その起源と結果に、「傲慢なエゴで膨れ上がり、自由な自己決定を愛し、競争心に燃え焦がされ、友人たちの友人である者、自己の尊大さ、大胆さ、勇気と情熱によって他者と同等の立場に立って向かおうとする者・・」があると言い、「一一、一二世紀の間に（スペインは）アル・アンダルスから、またピレネーのかなたから様々な思想、少なからぬ技術、文学や美術の多様な様式、色々な制度を受け入れ、同時に少数派であったモサラベと西欧からの移民を同化していった。・・・（この間）徐々にではあっても、生の様式を変えていくことができたはずである。・・しかし、近代の初めに起った頓挫も、このような生き方とこの世界と対峙する仕方を固める方向に向かった。」

　現実的には、このような議論を展開することによって、氏は一三世紀に生まれ一五、一六世紀に再確認されるカスティリャ史学（後にスペイン史学）の伝統に忠実に従っているのである。つまり、スペイン的なるものは、伝説や神話が入り乱れた先史時代に生まれ、キリスト教西ゴート時代に再び固められ、レコンキスタの困難きわまる作業のおかげで再出現すると考えるのである。この歴史観は、一九世紀の歴史学においても有効性を保持し続け、ドイツの歴史法学派によって発展させられ、例えばイノホサに大きな影響を与えた「民族精神（volksgeist）」の理論と結びついた。その当時、ヨーロッパのあらゆる国で、カーロ・バロハが「国民的性格という神話」と呼んだものについての省察が最高潮に達していた。ただし、このような考えは近代に始まったことではなく、その前例は一二世紀にまで遡る。つまり、これはヨーロッパ文化に恒常的に存在していたもので、一九世紀の特殊性を前にしてのことだけではないのである。例えば、一四五九年に書かれたアルフォンソ・デ・パレンシアの『軍事的勝利の完全性についての考察』というほとんど知る人のない書物――「昼食と夕食以外には一口のパンも一滴のぶどう酒も口にしない・・ヒゲもじゃの愛想の悪い

スペイン人」が主人公となっている——で、著者はフランスとカスティリャの同盟に対し合点が行かないと不平を漏らしている。「いつも愉快で笑顔を絶やさない冷静な人々と、とても悪意に満ちた考えを得意とする非常に暗い有害民族を結びつけるのは賢くない」と。

王政復古の時代に、スペイン国家の歴史の中でスペインとは何かを再確認する必要性が以前よりずっと緊急事と感じ始められるようになると、これらの古い流れは強化され活発になった。そのことは、メネンデス・ペラーヨ(『スペイン異端史』)、ラファエル・アルタミラ(『スペイン民族の心理』)、あるいは九八年の世代の思想家たちの考察、例えばスペインの「内部の歴史」についてのウナムーノの論考、または数年後のメネンデス・ピダルの考察などのような、非常に多様な思想の出現が浮き彫りにしている。

「歴史的統一体としてのスペイン」というアルボルノスの考えは、大部分これらの前提の上に立っている。しかし、これらの心理的歴史理論はどの程度まで今でも有効性を持つのか、あるいはもし持つとしたら、どのようにそれを表現し、スペイン史の新しい解釈において利用するべきなのか。なるほど、それらを本質主義的とか掴みどころのない空論として無視することは簡単である。しかし、それは何の解決にもならない。たとえその「スペイン的人間」がガリシアの魔女のように実在しないものであったとしても、もしヨーロッパの歴史が共通のシステムの枠内での地方的な変種と特殊性の集合であるならば、誤解を生じさせる表現ではあるが、「国民的性格」というものの問題はやはり存在するのであり、もしそれに知的で学問的に適切な説明を与えなければ、しばしば危険な思想を生むのである。

集団としてのスペイン人の歴史的特徴がある程度遠い昔に起源を持つことを否定する人々の間で、少なからぬ数の人が今日多大の努力を傾けて、カナリア諸島の住民がその原住民グアンチェスとベルベル人の子孫であると、またガリシア人はケルト人の、アンダルシア人はタルテッソス人の、バスコ人はイベロ人の子孫であると関係付けようとしていることが目につく。または、すでに一八世紀にフェルナンデス・デ・モラティンがスペイン

人の特徴として指摘したのであるが、自国とその現実をけなすという「スペイン的人間」に極めて独特な態度が、今日我々の間で過激になっていているのも無視できない事実である。また次の事実も看過できないし、見た目ほど瑣末な問題ではない。つまり、マスコミ関係者が唯一確実かつ有効であると考えているように見える「スペイン的人間」の側面が、クラウディオ教授が、集団としてのスペイン人における「猥雑なもの」と「大衆的なもの」の重要性を強調しようとして、「スペイン的下品さ」と定義したものであることだ。このように見てくると、現在、テレビの吹き替えの担当者や脚本家の多くが真の「スペイン的人間」を体現するようになったことが浮き彫りとなる。この人々は、我々の過去の恥ずべき側面の一つから生まれた純粋な「大衆的文化」を創出する手段として、この国を下品な言葉と粗野な言葉使いが乱れ飛ぶ刑務所にしようと躍起になっている。子供たちや若者たちの日常会話に少し耳を傾けるだけで、彼らの試みが無抵抗の大衆にどれほどの成果を挙げているかが理解できる。もし他のヨーロッパの国であれば、これほど簡単に同じ成果をあげることができるとは到底思えないのだが。

四　中世スペインのキリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒

中世史家としてサンチェス・アルボルノスは、議論の中心を七世紀から一七世紀というタイムスパンの中に据える。しかしながら、今から紹介する氏の視点に見られる若干の限界と特殊性をよりよく理解するためには、氏の専門分野が西ゴート時代と一一世紀以前のアストゥリアス・レオン王国の歴史で、場所的には中央山系の北部を対象としていたこと、また一九五〇年代の中ごろでは時代としては一三世紀から一五世紀の歴史研究、また空間的にはカスティリャ・レオン王国以外の歴史研究はまだほとんど未開拓であったことも考慮に入れねばならない。もちろん、サンチェス先生は門下生たちにそれらの研究も励まし、その結果、カルレ、グラソッティ、グリエルミ、ペスカドール・デル・オヨ、パストール女史らによる偉大な研究成果を参考にすることができたのであ

るが。

氏の主張するところは、八世紀に始まるアラブ人とベルベル人の侵入、それに続く住民の大多数の漸進的イスラム改宗、この二つの事件によっても、「スペインの生の真髄はアラブ化しなかった」ということである。それは宗教的理由で正当化しようとされたが、実際暴力的な事件で、軍事的、政治的、文化的な侵入であり、結局はスペインの後の歴史には異質のものであった。言うまでもないが、氏の著作は、スペインの過去とイスラムに対抗して成長したスペインにとってイスラムが何を意味し、また何を貢献したかについての評価において、豊かで著しくきめの細かな議論を展開する。しかし、氏の主張の骨格は、上のように要約されると思う。

それはそれとして、アル・アンダルスに対抗し、またアル・アンダルスを駆逐することによってスペインは建設され、現在の我々はこのスペインを相続しているという議論は、極めて伝統的なものである。それは、すでに九世紀、つまりサンチェス・アルボルノス自身がアストゥリアスの新ゴート主義と名づけたものが生まれたときから考えられてきたもので、中世から近代に伝えられ、つい最近に至るまで歴史家たちによって何度も繰り返し使用され磨かれた解釈なのである。

現在ではこの伝統的説明がもつ一方的で排他的な側面は受け入れられないとされるが、にもかかわらず、多岐にわたる大きな問題が依然として我々の前に立ちはだかり、歴史家たちの論争の種となっている。それは次のようにまとめることができよう。

(1)イスパニアの征服とイスラムによる他の地域の征服とよく関係づけ、地中海の他の地方で起ったこととを比較すること。スペインの西ゴート王国をあれほど簡単に崩壊させた、その弱点はどういうものであったかをより正確に調べること。

(2)アル・アンダルスとその住民の歴史に関して、時代差と地方差を考慮に入れること。しばしば見られるように、スペインの歴史におけるイスラムの役割を受け入れるにせよ、否定するにせよ、それを一つの固まりのように考えないこと。同様に、古典的イスラム世界もすでに均一の文化をもったブロックでは

なく、スペインイスラムは、少なくともその世界の地方的変種の一つであった。

(3)アル・アンダルスにおいてイスラム以前の要素がどのように、また地方と時代によるどのような微妙な違いを見せながら生き残り、スペインイスラム人に影響を及ぼしたのか。モサラベの実際の重要性は、とくに農村部において、どのようなものであったのか。

(4)これも以上に劣らず重要であるが、何百年にもわたるイベリア半島を舞台にした戦争、征服、植民活動の末に西欧文化圏に組み入れられたスペインに、アル・アンダルス起源の諸特徴がどのようにはめ込まれたのか、あるいは生き残ったのか、を想像や誇張を排して実証的に調べること。

現在、マスコミは、中世スペインにはイスラム、ユダヤ、キリスト教の三宗教の文化が現実に調和を保って共存していたが、一五世紀の末にその共存が破壊され、その結果として非ヨーロッパ的なものとしての独自スペイン的なものが結晶した、そして、これが原因となって近代スペインの失敗と脱落を生み、スペイン人が特殊なあり方、生き方をする民族となった、という説を人々の間に広めようとしている。この見解が独断と幻想に満ちていると証明しようとすれば、それらの試みは必ず多くのマスメディアが出す騒音の前に失敗に帰するようだ。このマスコミの企画は、よりよい未来を作るためのプロジェクトとしては賞賛に値するものであることは間違いないが、過去の真実の描写としては、フランコ時代に作られたスペインとアラブ諸国との「伝統的な友情」という表現と同じく、議論に耐えるものではない。

正直に言うなら、クラウディオ先生がスペインの過去についてのカストロの書物の中で上記の主張のオリジナルを読まれたとき、歴史家として侮辱されたと感じたとしても不思議には思われない。カストロの解釈は、文献史料、中でも文学的史料をもとにして、思想、信仰、心象、とくに宗教的心象、などを描き出し、それらに常に輝かしく、しばしば一方的な形を与えて、なかんずくスペインの現実の歴史は七一一年になってやっと始まった

と結論する。カストロの説の相当部分は、彼自身は黙っているが、メネンデス・ペラーヨの説、とくに『スペイン異端史』に見られる説をひっくり返したレプリカである。つまり、過度にカトリック的なスペインは、三宗教の共存が失敗に終わった結果生まれたもので、この失敗が不安定で消えない深い傷跡をすべてのスペイン人の心性、中でもユダヤ教からの改宗者という典型的なグループの心性に残したという説である。

本稿ではサンチェス・アルボルノスがアメリコ・カストロに挑んだ論争の内容には立ち入らない。この挑戦に対し、カストロはいつも正面から答えを返すことを避けた。このために、我々は以下のような疑問に悩み続けるはめとなった。つまり、なぜ彼はただ文学的史料だけにそれほどの有効性を与え、しかも特殊でかつ一般化する仕方でそれを解釈したのか。あるいは、なぜユダヤ人の存在と文化に、イスラムとキリスト教のそれに匹敵する重要性（現在ではこれは否定されている）を与えたのか。または、他宗教との共住を厳しく制限するこの三つの宗教の人間が、平和裏に共住したとどのように説明するのか。そして、とりわけ、なぜ文化決定論的な歴史の形式に閉じこもり、当時スペインとヨーロッパの中世史研究が発見しつつあった幅広い歴史の研究方法と様々な歴史的現実を考慮に入れることを拒んだのか。なるほどサンチェス・アルボルノスも、ときどき論争の激昂のため、あるいは個人的な確信のために、スペイン史におけるイスラム教徒やユダヤ教徒の役割を極端に制限したり、あるいは物質的文化や日常生活や芸術的な創造的文化の伝播などの面を十分に熟考することができなかった。しかし、後者に関して言えば、氏が問題に含まれるすべての側面を手の届く範囲にあるあらゆる知識を総動員して研究しようとしたことは否定できない。

五　レコンキスタか、封建制か

サンチェス・アルボルノスにとっては、中世スペインには文化的共生(simbiosis)というものは存在せず、むしろレコンキスタを通しての「敵対的並存」(antibiosis)があった。もっとも、このこともアル・アンダルスに負債をもつ文化的要素が形作られたことを意味するが、調

和をもった共住によるのとは大変異なった仕方によって、となる。しかし、そしてここで鍵に突き当たる。今から半世紀前には「レコンキスタ」という言葉で何を理解していたのか、また現在はどうなのか。現在、多くの人々が、中世の歴史を理解するためにレコンキスタという言葉を使うことは誤っていると考え、単に征服、つまりアル・アンダルスの社会と文化が西欧キリスト教のそれに代わっただけと考えることを好む。しかし、たとえそうであっても、「レコンキスタ」の概念が中世に生まれ、そのプロセスの多くの側面を思想的に正当化するために役立ったという点で、中世の現実に関係するものであるということも真である。一世紀前には、いや半世紀前でさえも、このような考察はほとんど理解されず不必要と思われたであろう。なぜならば、「レコンキスタ、イクオール、スペイン国家の起源」という方程式は、あの当時はまだ掛け値なしに普遍的に認められていた概念であったからである。

サンチェス・アルボルノスは、それをそのまま受け入れた。が、中世史研究を深めるにつれ、「再」という小辞について新しい見解を可能にする知識と議論を提供した。そして、この事実を、彼の批判者たちは、論敵の議論のどこが不十分で無効であるかを示すことに熱心になりすぎたあまり、いとも簡単に見落としている。サンチェス・アルボルノスは、辺境と辺境社会という概念を発展させ、ドゥエロ川流域にそれを当てはめたので、無人化と再植民の段階が存在したこと、レオンとカスティリャでは中世前期にその段階を通じて新しい社会が形成されたことを主張し、レコンキスタとは、奪われたと考えていた土地を征服することであるかも知れないが、以前にあった歴史的現実や状況を再構築することではなく、たとえその中に古い考えや気質が残っていたとしても、新しい社会をいわばゼロから創造するための出発点であったとする。今日では無人化は多くの地域で完全なものではなかったとされるが、九世紀から一三世紀の間に新しい社会が建てられたことを疑う者はいない。

辺境と植民は、氏によれば、小さな自由農民が大半を占める社会を生んだ。これらの自由農民は、自分たちの間に貴族階級には属さない「平民騎士」（caballeros

villanos）のグループを生み育て、後にはある程度広い地域を支配する政治的に独立した都市議会を出現させる社会の基礎となった。我らの論者は、この状況を当時のヨーロッパで典型的なモデルであったカロリング朝崩壊後のフランスと比較した。そして、ピレネー以北の西欧封建社会と、中世初期の数世紀のあいだ封建制度が存在せず、大部分の農民が自由身分であったカスティリャ・レオンとの違いについて若干の結論を引き出した。このような主張を発表するとき、氏は、自分が抱いていた自由への知的熱情や政治的態度を歴史解釈に心もち混ぜあわせていたと言えよう。それは一九九三年、カルロス・セコ・セラノが氏の心情を次のように表現しているとおりである。「もし我々の中世の先祖が、自分たちを一時的に指導する者を好みのままに選ぶことができる、自由で平等な個人からなる社会を作ることができたのなら、二〇世紀の中ごろに住む彼らの『子孫』がそれと匹敵することができないことがあろうか」と。

　これらの問題についてのアルボルノスの研究には、もし私の判断が誤りでなければ、今日でも有効な側面がある。すなわち、とりわけカスティリャにおいて隷属農民の封建負担が他のヨーロッパの地方と比べてほんの少ししか普及せず、あるいはずっと後になって現われたこと、また植民活動の進展によって小土地所有者がふんだんに生み出されたことも確かである。ただ、小土地所有が何世代も経った後もそのまま残存したことは否定されたが。この他にも、封土—臣従関係を軸にする制度は中世後期になって初めて、しかも部分的な発展しか見なかったこと、世俗貴族が領地の世襲権（土地所有権とともにか、住民への裁判権だけかはともかくとして）を譲渡されるのも中世後期になるまで一般的ではなかったという氏の議論もいまだに有効性を失っていない。もちろん、修道院や騎士修道会や高位聖職者のいくらかのケースには、より古い形の領主支配も見られたが。

　ここで見落としてはならないのは、氏が扱っていた封建制の概念と、今日これらの問題を扱う多くの歴史家たちが使用している概念とは同じではないという点である。私には、この点を理解しないことが氏への批判を的外れにしていると思える。氏はあの当時は新しく、後で

見るように、当時だけでなく現在もまだ有効性を失っていない基準を使って研究していたのであるからだ。事実、サンチェス・アルボルノスは、王と貴族たちを互いに結び付けていた政治的法制的封建制度と、封建賦役を伴うか伴わないに関わらず農民にのしかかる領主制度とを区別していたが、このことは、ブロック、ガンスホフ、ブートリューシュや他の多くの歴史家と同じであった。彼らは、私には正しかったと思われるが、このようにして封建制度に関する古い啓蒙主義的な概念の中に、分析と分類のための要素を導入したと考えたのであった。一八世紀にアンシャン・レジームに対する飛び道具として生まれた封建制という概念は、後でマルクスがそれを生産様式として定義することによって普遍的なカテゴリーに変形したのだが、今日では生産様式がそのような歴史的現実である、あるいはあったと認めるものは一人としていないこと、それらは歴史的に存在した社会的システムまたは形式を理解するための概念的道具に過ぎないことをついでに思い出すことはよいと思う。もし、マルクス主義の歴史家たちや他の多くの学者が、封建制度という概念を、中世の社会関係の体系を全体として表すために使い続けたいのなら、それはそれで問題があるとは思わない。しかし、次のことも相変わらず確かである。つまり歴史家の仕事は個々の状況を概念的に分析するという作業を回避することが許されないということ、そしてこの作業は、もし我々が説明のために用いる語彙を、それ自体統合的な性格を持つ一つの言葉、―封建制度、封建的―に還元したり、それを普遍的な形容詞として使うならば、それは不可能になるということ。そのためにこそ、我々の「論理の道具」を、現在進められている分析と解釈を伝えるために有効な、共通の理解を得ている、他の言葉でもって豊かにすることが不可欠なのである。もし、このことがカロリング後の「初期封建制度」とカスティリャの非封建制度を対比し、封建制度と領主制度を区別していた数十年前にすでに真実であったなら、そのシステムに属する多くの地方的亜種が発見され、典型的な封建制度という概念自体が放棄された今日ではなおさらのことであろう。

六　古く新しい説明

サンチェス・アルボルノスの歴史的考察には、近代スペインの母胎となった中世の王国と社会がいかにして生まれ発展したか、中世にスペインの概念が何を意味していたのか、またスペインの歴史がヨーロッパ全体の歴史の中にどのように組み入れられていたのか、といった問題を説明し理解するためにきわめて重要で多岐に及ぶ要素が見られる。しかし、あれからもう数十年が経ち、今日ではいくらかの分野では研究はさらに進み、新しい展望が開けている。

時折、アルボルノスの解釈はカスティリャ中心主義であると言われる。なるほど、もし「中心主義」を取り去って、「カスティリャ的」とすればその主張は正しいであろう。そして、このことについては、『スペイン、歴史の謎』の第二巻四一六から四一八ページに見られるカスティリャの「中央集権主義」と「帝国主義」についての氏の議論を熟読した後で、若干の考察を述べることができる。というのは、それは熟考に値する考えであるし、私の見るところでは、簡単に消化できる考えであるからだ。ただし、あきらかに歴史を歪曲することになる「プロ・カスティリャ」あるいは「反カスティリャ」という単純な二分法を避けるとならば、という条件をつけねばならないが。いずれにしても、いくらかの補完的な考察を氏の考えに付け加えることもできる。というのは、サンチェス・アルボルノスは以下の伝統的な史観に基づいているからである。つまり、少なくとも中世後期から、カスティリャ王国が古の西ゴート王国が歴史的政治的に意味したものを相続し、その結果その二つの面についてスペインの再構築の中核となり、この核のまわりにイベリア半島の他の王国、ポルトガル、ナバラ、アラゴン、カタルーニャが加わると考えるものである。この主張は部分的にしか正しいとは言えないにしても、この考えを土台にして王朝の統一と近代スペインの王政の発展がなされたことは疑いがない。それゆえ、あのアルボルノスのきっぱりとした断言、「カスティリャがスペインを作り、スペインがカスティリャを潰した」は、「スペイン」という共通の概念の中にカスティリャ的なものが取り返

しのつかない形で融合したという意味で正鵠を得ている。しかし、これだけが唯一の確かなことではない。今日では、よりバランスがとれ、また完全な形で中世の状況とその歴史的遺産を理解することが可能である。つまり、「スペインの母型」を肯定した上で、同時に、多くの場合「イスラムの侵入に対する反抗の多様な様態から生まれた」(Martínez Show) 様々な文化、言語、地域の現実がどのように発展したかを研究し、あるいは何世紀にもわたる征服と植民活動、土地の支配と社会の組織化がどのようなリズムをもって、どのような特殊性と時期による変化を見せながら進展していったのかについて研究することが可能となっているのである。

その伝統的見解によって氏が陥ったと考えれるもう一つの解釈上の欠陥は、スペイン南部の忘却である。ちょうど、中世後期には全貴族が北部出身であると(なぜなら北部こそレコンキスタに参加した貴族の揺りかごであったから)考えられていたように、つい最近までスペイン中世史の主役は半島の三分の一を占める北部地方にあり、残りの地域は国境線が南下するに従って、せいぜい北部から来るものを模倣するか適応させるかしかしなかったと考えられていた。この国のかなりの部分が、この北部中心の見方では自分たちの真実の姿が表されていないと感じていたのはもっともである。この点においては我々の視点はかなり変化したが、それはアルボルノスの見解に反駁するのではなく、むしろ補完することになった。ここ数十年の間に、例えば、征服されたイスラム教徒の残存または移住、ムデハルという現象の実態、イスラム世界との接触の仕方、ユダヤ人や改宗者の置かれた状況、などに関して導入された新しい解釈や少なからざるニュワンスの変化は、まさにこの南部に焦点を向けるという変化のおかげである。

一九五〇年代には、一三世紀以降の中世後期の歴史はあまり研究されていなかった。アルボルノスが多大の貢献をした中世前期の研究に起ったたような変革は、中世後期の研究にはまだなされていなかった。それゆえに、氏の中世後期についての諸説は、常に先鋭でしばしば的を得ているが、それには少なからぬ補完をしなければならない。中世後期は前期と同様に重要な時期である。なぜ

ならこの時期に近代の王政がとる政治的な方向性が形作られ、新しい貴族階級と新しい領主制度が固まり、地方の組織が輪郭をはっきりさせて定着し、危機と発展を繰り返しながら都市生活と商業が発展、社会的身分の差がより厳格になり、あるいは新しい土台の上に教会生活と文化的世界全体が基礎付けられたのだから。またこの時期は、スペインの諸王国が、もう安定した仕方ですっかり西欧世界の一部となった時期でもある。氏が、まるで暗闇に飛び込むかのように、天才的な直感をもってレコンキスタとアメリカの征服を結びつけたとき、的を射た説明を編んでいたのだが、しかしほんの少しの糸しか使うことができなかった。今日では、この空間はほとんどすべて埋め尽くされ、我々は氏の理論をよりよく発展させることができる。

再び我々は、氏の理論を反駁するのではなく、それを乗り越えて完成に近づける可能性に遭遇する。というのは、クラウディオ教授の教えは、その後歴史の専門家の間では忘却されてしまった、全体的な説明と考察という面でいまだに鋭い示唆に富んでいるからである。ここ数十年の間、しばしば局地的な範囲に対象を限った社会経済史の問題を扱う歴史研究が大半を占め、現在やっと異なる標語の下に再び現われた視点の基本的重要性がほとんど忘れられた。その新しい視点とは、「新しい政治史」あるいは権力の歴史、または「想像の歴史」や「民衆の宗教性の歴史」、そしていわゆる「歴史人類学」などの標語の下に促進されている研究である。新しい問題提起や方法論を知り使用することはためになることであるが、次の事実を確認した上でするべきである。つまり、これらの視点はすでにスペイン史に関する論争の中で中心的な位置を占めていたこと、そして制度史家としてのサンチェス・アルボルノスがなした超人的な仕事、あるいはスペイン中世のキリスト教徒の宗教的感覚について、またスペイン的なるものへユダヤ人の貢献の限界について氏が達成した高いレベルの研究は、失われた鎖ではなく、その結論が今日どれほどの賛成が得られるかは別にして、我々の財産となり知の可能性の一部をなしていることである。

サンチェス・アルボルノスを読むと、我々の社会にと

って不可欠な学問の一分野を担当する専門的歴史家の存在意義の根本を発見する自分に気付く。こういうのは氏の賞賛のためではない。なぜなら氏はそのような賞賛を必要としないからである。これは我々自身への挑戦として言う。我々は氏の歴史家としての業績が残した巨大な遺産を支え、それを乗り越えていくことができるようにならねばならない。「それを支えろ。しかし射直すな」は、正しい行動ではない。氏自身できるならば、自分の研究でそのような態度を排斥されるだろう。氏の遺産を軽視し忘れるならば、嘆かわしいひどい過ちを犯すと言わねばならない。

（注）本稿はマドリッド、コンプルテンセ大学の中世史主任教授 Miguel Angel Ladero Quesada,氏の“¿Es todavía España un enigma histórico? (Releyendo a Sánchez Albornoz)”,1993 en *Lecturas sobre la España histórica*,pp.317-341, Real Academia de Historia, Madrid, 1998の訳である。これは一九九三年七月、同大学の夏期講座の中で行われた講演を論文に書き直されたものである。

ラデロ教授は、一九四三年生まれ。現在上記の教職以外に、スペイン王立歴史アカデミー会員でもある。専門は一二〜一五世紀のカスティリャ史。主な著作としては *La España de los Reyes Católicos*, Madrid, Alianza Editorial, 2000. *Granada. Historia de un país islámico, 1232-1571*, Madrid, Gredos, 1989. *Historia Universal. Edad Media*, Barcelona, Ed. Vicens-Vives, 2001 (1ª ed. 1987). *Los señores de Andalucía*, Universidad de Cádiz, 1998. *Fiscalidad y poder real en Castilla. 1252-1369*, Madrid, Universidad Complutense, 1993.などがある。

（本学非常勤講師）